

事例5 谷津ミュージアム事業（千葉県我孫子市）

概要

手賀沼沿いで谷津の地形と自然環境が残されている地区を保存するプロジェクトである。昭和30年代の伝統的な農業や暮らしの風景である農村環境を復活させ、丸ごと「野外博物館（ミュージアム）」にしようとしている。20年後の将来を展望した長期プロジェクトとして位置づけられおり、市民と自然との触れ合いや、農業者と消費者の交流が図られ、「自然と人との共存」がミュージアムのシンボルになる予定である。また、谷津守人と呼ばれる谷津を守り育てる人づくりも行っている。

テーマ	自然再生と野外ミュージアム設置による自然と人との共存
主体・キーパーソン	我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会、我孫子市
手法・技術	復田 野外博物館の設立 谷津守人を育てる人材育成



谷津ミュージアム
事業構想エリア
(出典：
我孫子市HP)

背景

我孫子市は、千葉県北西部の北総台地の一角にあり、手賀沼と利根川のある水の豊かな土地である。一方、市制が始まった1970年時の約5万人から約13万人に人口が増える等、恵まれた環境と首都圏30km圏内という地理的条件から都市化が進み、谷津の宅地化が進

んでいる。さらに、谷津田特有の深田のため、放棄された水田が多く、周辺の宅地化による湧水の減少もあり、乾燥化が進んでいる。

市では、1987年度の第二次総合計画で、手賀沼を町のシンボルと位置づけ、手賀沼沿い、岡発戸・都部の谷津、利根川沿いを「水と文化の軸」として、町の骨格づくりのメインにした。1997年には、「手賀沼を誇れるまちづくり」をまとめ、水質改善と自然環境の保全・再生・活用のための事業計画を策定している。その後も、斜面林を保全する条例や農業振興と環境・観光を結びつける「手賀沼農舞台」計画を実施し、2002年に将来都市像を「手賀沼のほitori 心輝くまち」～人・鳥・文化のハーモニー～とする新総合計画の中で、本事業が明記された。

新総合計画を受けて、手賀沼沿いで最も谷津の地形と自然環境が残されている岡発戸・都部地区の谷津 36.7ha を手賀沼の原風景の象徴として保全し、昭和 30 年代の農村環境の復活を目指す「谷津ミュージアム」事業が 21 世紀プロジェクトとして始められた。開発が進まなかった本地域は、斜面林に囲まれ、中央に排水路が流れ、両側の山裾にはハケの道が続く。また、ニホンアカガエルやヒキガエルが生息し、オオタカ・サシバの餌場となる等、自然が残されている。

取り組みの内容

1. 「谷津」とは

台地に谷が入り込む独特の地形で、その細長い低湿地部は昔から水田として利用され、谷津田と呼ばれてきた。谷津田は、米を生産する場であるだけでなく、隣接する林地と合わせて、様々な生き物を育む場でもある。千葉県北部の特徴的な地形である。

プロジェクトの計画地は、対象面積 36.7ha で、7 割を占める農地のうち約 4 割が実際に耕作されている農地で、残りは休耕田や耕作放棄地になっている。地権者数は 202 名、農地所有者のうち耕作しているのは、24 名（岡発戸 5 名、都部 19 名）となっている（計画策定段階）。

2. 構想内容

多様な生き物が生息していた昭和 30 年代の農村環境の復活が狙いであり、「農業・自然・暮らし」を一体としてとらえている。以下のような目標がある。

・多様な生き物の種の保存や回復を進めます

ー谷津は、かつて普通に見られた身近な生き物が育む、豊かな自然の宝庫である。今も身近に残る生き物とその環境を保全するとともに、池や湿地環境の再生を図り、郷土の生き物を回復し、将来に伝えていく。

・谷津の自然を保全していく「谷津守人」を育てます

ー農業や暮らしの営みによって育まれてきた谷津の自然は、人が自然との関わりを大切にしながら受け継いできた環境である。自然の恵みを受けるだけでなく、谷津の自然や農地を育て守る実践を通

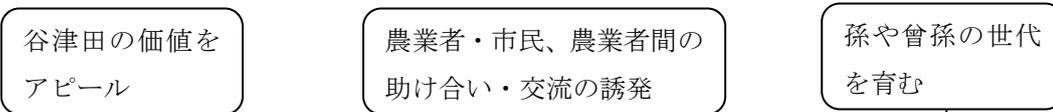
して、「谷津守人」と呼ばれるような人づくりを重視した活動を展開する。

・伝統的農業と文化を継承し、新たな暮らしを生み出していきます

―昔ながら（昭和30年代）の水田づくりは、自然環境の保全や伝統的文化の継承、自然と共存する暮らしを実践していく上で重要な意味を持つ。谷津での水田づくりを続けていくために、多くの手間と労力を必要とし、これを市民と協働で支えていく仕組みづくりと体制づくりが重要となる。農業者と市民の協働により、自然・暮らし・農業の3つのバランスがとれた環境づくりに取り組んでいく。

【エコミュージアム展開イメージ】

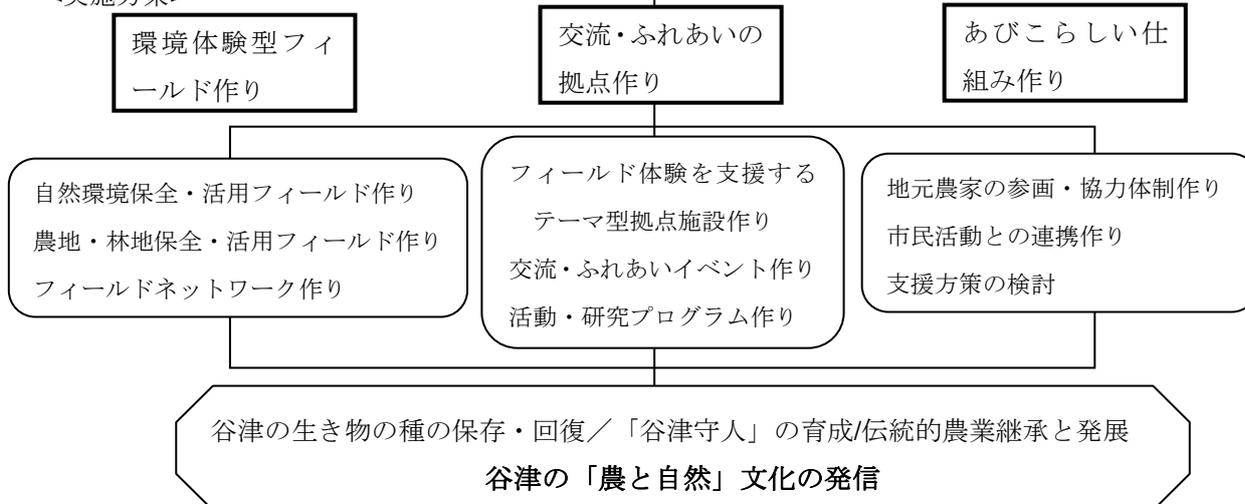
<着眼点>



<テーマ> - 谷津の「自然・農業・暮らし」の野外博物館 -

谷津ミュージアムの創造

<実施方策>



我孫子市環境基本計画の中では、「手賀沼沿い環境軸」、「利根川沿い環境軸」、「南北をつなぐ環境軸」を我孫子の地形を活かした環境づくりの骨格として位置付けている。その中で谷津ミュージアムは、手賀沼・古利根沼・利根川を結ぶ「南北をつなぐ環境軸」を形成する谷津・里山の復元による農と環境の拠点としての役割を持っている。

計画の対象は、農地とその周辺環境で、各地域の取り組み、ネットワークづくり等を段階的に行い、それらをつなぎ合わせることで全体を作っていくゾーニング方式をとっている。ゾーンとしては「谷津の原風景」保全・活用ゾーン、「谷津の農業と新たな暮らし」共生ゾーン、「谷津の田園集落」まちづくりゾーンがあり、ネットワークには、ハケの道ネットワーク、里地・里山ネットワークづくり、水のネットワークがある。

「谷津の原風景」保全・活用ゾーンでは、湿地生態園やホテル・アカガエルの里のよう

な身近な生き物を育む豊かな水環境の形成、作業スポットや環境ふれあい拠点のような多様な自然環境を活かした体験学習フィールドの形成等が展開されることになっている。「谷津の農業と新たな暮らし」共生ゾーンでは、谷津の自然に配慮した水田づくりを支える環境・景観形成、農業者間の協力及び農業者と市民の交流を図る場と仕組みづくりが考えられている。「谷津の田園集落」まちづくりゾーンでは、地域・広域に開かれた交流イベント拠点の整備、屋敷林や生垣の保全等により谷津と一体的な田園集落としての地区づくりが取り組まれることになっている。

また、我孫子市では、崖線沿いに一周できるネットワーク形成、「あびこ一周ハケの道」を進めている。これは、台地（住宅地・農地）～斜面林～谷津～水田・水辺という地形的特徴による変化にとんだ環境のつながりをネットワーク化しようというものである。かつて我孫子市内に多く見られた谷津田では、ハケの道を使って農作業や斜面林の管理が行われ、また、湧水といった水場を結ぶ等、生活に密着した小道になっていた。暮らしの道としてのハケの道の特徴を残し、台地上の田園と農家集落、斜面林、谷津田、水路が作る一体的な環境が見られるため、計画地はネットワークの重要な拠点の一つとなっている。現在、自然景観を残しながら徐々に整備が進められており、市民の散歩コースとして親しまれている。



多自然型護岸改修部分

（出典：農村計画学会若手ネットHP）

3. 我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会

我孫子市では、市民活動が行政よりも先行しており、活発に活動している。手賀沼の水質汚濁を改善しようと、1974年に「我孫子市消費者の会」、1978年に15団体から成る「我孫子に石けんを広める会」が結成された。自然保護系の活動としては、1972年に「我孫子野鳥を守る会」、1988年に古利根沼の保全と整備を市と連携して行う「古利根の自然を守る会」、1995年に14団体から成る「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」（現在の会員は23団体）、1999年には「岡発戸・都部の谷津を愛する会」が結成されている。

さらに、2004年に、谷津ミュージアム事業を進めていく母体となる「我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会」が行政の呼びかけにより設立された。本会は市民（「谷津を愛する会」、「我孫子や町を守る会」、谷津学校卒業生等）、地元農家組合、地元自治会の各代表者等が発起人となり、市と共同運営している。自然観察、雑木林づくり、農道の草刈りをはじめ、休耕田の復田作業等を進めている。この活動を通して、谷津守人と呼ばれる人

づくりが行われている。

4. 谷津学校

2003年度に、「谷津守人」と呼ばれる人づくりをしていくために開校した。自然の恵みを受けだけでなく、谷津の自然環境を構成する湿地、斜面林、水辺や農地を守り育てていく人材の育成を目的としている。1年間の座学・実技の講座を終了した谷津学校卒業生は、水辺づくりや林の維持管理をはじめ、生き物調査等、谷津の自然環境を維持・再生するための活動を自主的に行っている。さらに、地元農家の指導により、放棄水田を復田し、無農薬による米づくりも行う。

2007年3月に4期生が卒業し、1～4期生で約30人が卒業している。2010年度は、8期生12名が谷津の農業や林づくり、自然の生態系等について学ぶ。

成果と課題

広域的な連携で市民による手賀沼浄化運動や自然保護運動が進められる等、市民活動が盛んなことが伺える。市職員は、活発な市民活動と連携しながら、谷津ミュージアムづくりを進めることが事業推進のポイントとしている。人材育成の面では、谷津学校の卒業生が活動のリーダーシップを取っており、うまくいっているといえる。

2010年には、谷津ミュージアム「たんぼ広場」の復田した田んぼで、かつての谷津で行われていた伝統的農業体験として無農薬による米づくりが行われている。

市では、農業者・地権者の理解と協力を課題としている。農家組合や個人への説明や補助制度を行っているが、相続発生時にどのように水田や山林を保全していくかが、最大の課題であるとしている。

昆虫調査をした中央学院高校では、谷津に多くの昆虫が生息する理由を現在まで広大な規模で谷津が残されてきたこととし、生息する種の減少を抑えるために早急に生息環境の維持、管理を行わなければならないとしている。

20年間にも及ぶ構想のため、まだ完成はしていない。

[参考文献・資料]

- ・環境自治体会議（2009）「環境自治体白書 2009年度版」、株式会社生活社
- ・我孫子市 HP <http://www.city.abiko.chiba.jp/index.cfm/21,12072,211,765.html>
- ・千葉環境再生基金 HP <http://www.ckz.jp/saisei/city/index.htm>
- ・農村計画学会若手ネット HP <http://furalpln.ac.affrc.go.jp/>
- ・千葉県我孫子市手賀沼課 石原正規（2004.2.14）「孫や曾孫の世代へ引き継ぐために 我孫子市岡発戸・都部の谷津ミュージアムづくりを」第1回里山勉強会 HP <http://www.satochiba.jp/satoshinpo/pphtml/abi01.htm>
- ・美しい手賀沼を愛する市民の連合会 HP <http://www.biteren.com/>
- ・中央学院高校 HP <http://www.chuogakuin-h.ed.jp/bio/insect/insect1.htm>